

九州・沖縄編

伊能忠敬宿泊跡碑

(福岡県宗像市神湊1, 220 「魚屋」前)



伊能忠敬宿泊跡碑

忠敬の「測量日記」には、各地を測量した際の村々の肝煎などへの協力依頼について記した「御触」には、村の石高、家数、天気や観測の有無、隊員の安否についてとともに、見舞客や止宿先などについても記述されている。

その「測量日記」には、以下のようにあり、この間に神湊で宿泊したと見られる。

「九月二十六日両隊肥前小城に於て相会し直ちに又分離して本隊はこれより川上、三瀬等を経て博多に達する街道を、永井支隊は神崎より博多に至る街道を測量し十月朔博多にて両隊再び相会同せり。夫より後両隊は交々博多より蘆屋に至る街道、秋月より豊前香春に至り転じて小倉に達する。……十月十一日小倉に着し以て九州測量を完了せり」(大谷亮吉 「伊能忠敬」から)

玄海町文化財専門委員の吉武謹一氏によると、この碑付近にあった永島兵衛門(本陣)と酒屋三之丞(脇本陣)を拠点に測量を実施したとのこと。文化10年(1813)の第二次九州測量の際のことである。(→伊能忠敬測量史跡→伊能勘解由忠敬測量遺跡)

忠敬の「測量日記」

伊能忠敬の測量日記には、測量先でその都度書き留めたものと、これをもとに後日書き改めたものがあり、いずれも伊能忠敬記念館が所蔵している。

前者は、その後昭和26年に補修され「伊能忠敬先生測量日記」(全51冊)と表題がつけられている。

残るは、単に「測量日記」(28冊)と呼ばれるもので、「蝦夷干役志 啓行策略 完」、「乙丑丙寅 沿海日誌 元」などと一冊ごとに表題がつけられていた。これも、昭和26年の補修のさいに、それぞれ「測量日記之内 一」、「測量日記 八」などと新たな表題がつけられた。

「伊能忠敬先生測量日記」は、前半はほとんど忠敬の自筆によっているが、後半は測量に協力した班員の筆によるところもあり、これにより清書した「測量日記」にも班員の浄書したものが含まれている。

いずれも、伊能忠敬測量隊の行動その他を知る上で貴重な資料である。最近になって、「伊能忠敬 測量日記」(佐久間達夫校訂 1998年)が翻刻刊行されたので、さらに身近なものになった。



「測量日記」

(伊能忠敬記念館パンフレットより)

英彦山神宮宝物館（「彦山小形」所蔵）

（福岡県田川郡添田町英彦山1）



英彦山神宮
（英彦山神宮HPより）

福岡県と大分県境にある英彦山（1,200m）は、大峰山（奈良県）、羽黒山（山形県）とともに修験道の三大霊山として知られ、三つの峰に別れた山頂の一つ中岳に英彦山神社がある。

同神社は、古くから神の山として信仰され、「日子山」と呼ばれていたが、嵯峨天皇の時代（809-823）に「彦」を、さらに霊元法皇（1663-1687）の院宣により「英」の字をうけ「英彦山」と称するようになったという。

そうした歴史を持つ英彦山神社が、元和2年（1616）に豊前小倉藩主細川忠興によって、彦山霊仙寺大講堂が再建された。

その時に使用された杉の余材で、「彦山小形」と呼ばれる英彦山の模型が作られた。

この模型は、山伏たちが幕府の役人や礼拝者などに英彦山を紹介・説明するときに使用したといわれる。

地形を平易に理解させるには、地図よりも立体模型の方が優れているのは言うまでもない。

ごく最近の例では、カーナビゲーションへの鳥瞰図の採用や、根強い絵図人気というものがあり、太平洋戦争後アメリカ軍が日本に駐留して真っ先にやったことは、空中写真の撮影であり、立体模型の作製でもあった。駐留兵に日本の地形・地理を理解しやすいように配慮したために違いない。

英彦山でも、山伏が修行のために分け入る険しい山々を、分かりやすく説明するために、縦136cm、横132cm、高さ64cmの立体模型が威力を発揮したであろう。

作成年代が正しければ、現存する我が国最古の地形模

型である。（→目黒ふるさと館→山口県立山口博物館〈防長土図の所蔵〉）

伊能忠敬 測量200年記念碑

(福岡県北九州市小倉北区 1 常磐橋たもと)



伊能忠敬 測量200年記念碑



伊能忠敬 測量200年記念碑

伊能忠敬測量200年記念碑は、彼の業績を伝えるものとして、測量開始200年を記念して、九州測量の起点とした小倉城下紫川・常磐橋のたもとに2001年9月26日建立された。

忠敬の測量は、江戸高輪の大木戸を便宜上の基点としたが、各地に測量の基点を設けたという明らかな記述は残っていない。常磐橋のたもとは、長崎街道、唐津街道、中津街道、秋月街道、門司往還の起点であるが、これも九州測量に際しての測量上の基点としての役割は明らかではない。

しかし、1809年12月小倉城下から開始した忠敬の九州測量の出発点であることは明白であり、当然ながら、忠敬の偉業を世界に紹介したシーボルトもこの橋を渡って長崎・江戸を往復した(1826年)。

記念碑は、直径3.2m、高さ50cmの御影製で、側面には当時の測量器具についての陶板製の解説が埋め込まれているほか、10年後に開封するタイムカプセルも埋設されていて、小学生らのメッセージが格納された。

記念碑中央には金属標が埋められていて、世界測地系が導入された2002年4月には、観測が行われ1級基準点となった。

長崎金星（太陽面経過）観測碑、観測台

（長崎県長崎市西山町1丁目 金刀比羅神社裏山 県指定史跡）



長崎金星（太陽面経過）観測碑

金星が日面を通過する（太陽面経過）時間を地球上の違った地点で観測・測定することで、太陽と地球の間の絶対距離を求めることができる。

金星の太陽面経過という現象は、ほぼ百年に一回の割合でしか観測できないこともあって、各国の天文学者は、この機会を捉えて世界的な観測網の中に横浜と長崎を選び、日本政府に観測許可を求めた。

明治 7年（1874）、明治政府になり、形式的には開国したとはいえ、その意味では安定期を迎えたとはいえない状態にあった。当時水路局にあった柳榎悦は、観測許可には困難が予想される中、その重要性を太政官へ具申した。その甲斐あって、外国人による金星日面通過観測が許可され、アメリカやフランス科学アカデミーの科学者が来日した。

フランスのジャンセン博士の観測隊は、西山町先にある金刀比羅山で、アメリカのダビッドソン博士・チットマンの観測隊は星取山で観測を行った。フランス隊は、観測の記念にピラミット型の観測記念碑を残したが（観測の成功を記念して、ジャンサン氏の願いを受け、山田与四郎氏が建てた。碑面には「惑星、金星通過を観測したのはこの位置においてである。1874年12月9日 フランス天文学者ジャンサン科学院総裁」とあり）、正確な観測地点は不明のままであった。1993年12月に、同観測碑から東へ約 24m離れた地点で、観測台の遺構が発見された。

測量との関連では、この時ダビッドソン博士が長崎・ウラジオストック間の経差を、更に延長してパリ・ロンドン・ワシントン等に及ぶ測定をした。同時に柳は長崎に大伴兼行、磯野健を派遣してこれを見学させ、東京へはチットマンをして両都市間の経差観測を実施させた。この時の観測から東京の観象台の位置は、北緯35度39分21秒、東経 139度44分57秒が得られた。この時の技術習得が後の日本経緯度原点決定へとつながる。

日本経緯度原点を決定するための基準となった長崎の経度観測地点である、ダビッドソン点（松が枝町）の正確な位置が未だ明らかでないが、この観測台とダビッドソン点との関係が明らかでないことから、同点の正確な位置を特定する手がかりとなると思われる。

ダビッドソンが、金星観測のほかに天文観測により長崎と東京との緯度差の観測を行って、日本で最初の経緯度原点値（東京都港区飯倉：チットマン点）を決定したことにちなんで、1997年10月に本碑の隣に「我が国初の経緯度原点確定の地」碑が建立された。（→日本経緯度原点、→初代水路部長柳榎悦の墓、→我が国初の経緯度原点確定の地碑）



フランス隊（金刀比羅山）観測台

シーボルト記念館

(長崎県長崎市鳴滝2-7-40)



シーボルト

(シーボルト記念館パンフレットより)

シーボルト (Philipp Franz von Siebold 1796-1866) は、江戸後期のオランダ商館のドイツ人医師で、シーボルト事件で有名である。

シーボルト家は、ドイツの有名な医師の家系で、特に叔父は産科医として著名であり、ヴュルツブルグに生まれたシーボルトは、大学で医学と博物学を学んだ。医師としては、内科・外科・眼科・産科などを得意とし、1823年、27歳のときに長崎に着任した。

日本を調査・研究したオランダ商館の医師としては、1690に来日し二度の参府に際して植物調査に見せかけて秘密裡に測量を行い、地図を作成し、日本の風土・人物について観察したケンペル (Engelbert Kaempfer 1651-1716 ドイツ人)、同じく1775年来日し、植物採集をしたツェンベルク (Carl Peter Thunberg 1743-1828 スウェーデン人) の両医師以来のことである。

当時のオランダ人らは、広さ 3,970坪、おおよそ65軒の建物と小さな空き地を持つ「出島」の中だけの生活をしてきた。南口の制札には、「禁制。出島町。一、傾城之他女入事・・・、一、断なくして阿蘭人出島より外へ出る事、・・・」とあり、彼らはここを「国立監獄」と呼んでいたという。

しかし、シーボルトは出島での診療と、蘭学者・医学者との交流によって、「出島に名医有り」の評判が立ち、長崎奉行高橋越前守などの好意を得て、町中の病人を治療するという目的で、外に出ることを許可されていた。

こうして、日本人患者を診療する傍ら、長崎郊外の鳴

滝塾などで、高野長英、伊東玄朴、戸塚静海、二宮敬作らの門人を指導した。シーボルトの博物学の研究は、制限された行動を補う目的で、各地から訪れる多くの門人に日本の歴史・地理・民族・動植物などについての課題を与えて、論文と植物・産物などを提出させることで(ケンペルに同じ)、あるいは病氣治療によるお礼の贈り物や日本各地の品々とヨーロッパの品との物々交換などを通して積極的に行われた。

1826年には、当時 5年に一度行われていた商館長の江戸参府に同行した。

その際、気圧計、高度測定のための機器、湿度計、寒暖計、クロノメーター、六分儀などを持参し、各地で経緯度などの測量を行った。

オランダ人といえども外国人の行動が厳しく規制されていた鎖国の時代に、これらが実施できたのは、30歳になるかならないかの若いシーボルトが、医学にもその他の学問にも、並みはずれたものを持っているという、通詞らの正しい理解があったからである。

これが、同行の通詞、役人の見て見ぬ振りの行動となり、旅行中の行動や面会もかなり自由に行われ、名医・識者としての評判はさらに高まった。

そうした理解者として、長崎奉行高橋越前守重賢、出島係の高島二郎太夫茂敦、通詞の吉雄権之助などがいた。

交友が続く中、彼は五年の任期を終えて帰国することになったが(1829年 9月)、間宮林蔵の告訴により、あるいは高橋景保の逮捕により(高橋景保の部下の図工による訴えと言う噂も)、高橋からシーボルトに国禁の地図が渡されているとの情報が得られ、折からの暴風雨で座礁した帰国船の積み荷から、日本地図や葵の紋服が発見された。いわゆるシーボルト事件である。



シーボルト記念館

(シーボルト記念館パンフレットより)

それまで高橋は、参府中に度々その宿舎を訪れて、天

文・地理などのほか、世界事情について意見交換をしていたが、ある時シーボルトの持ち物に、クルーゼンステルンの「世界一周記」や「東印度の地図」があるのを目にして、これを翻訳して公表することは、正しい海外事情を知ることになり、日本の利益になると考えた。

高橋の入手の意志に対してシーボルトは、日本・蝦夷の測量図との交換を求めた。高橋は国禁の地図を渡すことは、死罪にもあたる大罪なので当惑したが、我が国の地図を秘密にしても国家にとって利益になることは無く、むしろこの機会を失うことは、ロシアの南下するこの時期に国家の不利益になると判断して、地図を交換したという。

高橋が渡した地図は、伊能忠敬の大日本沿海輿地全図から調製した縮図で、郡名、村名などは片仮名で書かれていたと推測されている。

その後、捕縛されていた高橋は獄死、関係者も拘束され厳罰に処され、シーボルトも十四か月の取調べ拘留の後追放となった(1830年12月)。

同時に、便宜を図った、お付きの役人や通詞などの、シーボルトの理解者も処罰された。

国禁の地図等は幕府に没収されたが、シーボルトの巧みな行動で、写図となりヨーロッパに持ち帰られた。そして、発行された彼の代表作「日本」に所載され、ヨーロッパの地図と比較しても、これらの地図の正確であることが認められ、日本人の測量・天文学の進歩の証となったことは、皮肉である。

記念館は、オランダにあるシーボルトの旧宅がイメージされた建物で、常設展示室にはシーボルトの生涯と当時の日本と世界情勢などについて展示されている。

生誕二百年の今年には、(1996)彼の遺髪が里帰りし、これも展示されている。

シーボルトの墓碑は、ミュヘンの新南墓地に石塔をかたどって作られているという。また、誕生の地ヴェルツブルグには、銅像があるという。

日本では、長崎市の諏訪公園に記念碑が、記念館の南にはシーボルト宅(鳴滝塾)跡があり、胸像もある。

シーボルトの所持品から押収されたということが、紙片に明記された「カラフト島図」は、国立公文書館が所蔵している。

萩市の熊谷美術館には、シーボルトが当時長州藩の御用商人であった熊谷家当主に帰国の際に贈ったという、ピアノを所蔵している。当該ピアノは、現在日本最古のものといわれている。(伊能忠敬記念館→高橋景保の墓と頌徳碑→間宮林蔵蕪崇の墓)

坂部貞兵衛の墓

(墓碑：長崎県五島市末広町642 宗念寺)

(伊能忠敬天測之地碑：長崎県五島市栄町 東公園)



坂部貞兵衛の墓
(五島市教育委員会)

坂部貞兵衛(さかべさだへえ 1771-1813)は、本名を坂部惟道といい、幕府暦局の高橋景保の手付役で、数学にも長じていた。

文化2年(1805)以来、忠敬の測量に随行し、まじめな性格によって、忠敬や部下の信頼を得ていたという。貞兵衛は、測量だけでなく、測量結果の整理にも協力し、老齢の忠敬に内に外に支えとなっていた。

忠敬の全国測量は、享和3年(1803)以降、大手分といわれる本隊と支隊がかなり長期に渡って別個に測量を実施する方法によって効率的に実施していた。貞兵衛も、やがて支隊の隊長となり忠敬を補佐し、力を発揮していたが、文化10年(1813)長崎県五島西海岸の測量中に発病、かけつけた忠敬にみとられて、42歳の生涯を福江で終えた。

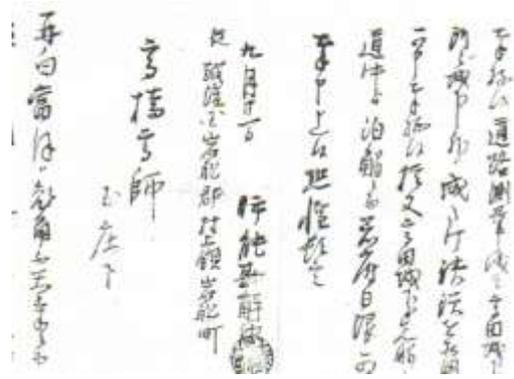
忠敬はそのときの様子を長女妙薫へ、次のように書き送るなど、非常に心を落としていた。

「御存の通り測量ニ付き候ては、年来の羽翼ニ御座候間、鳥の翼を落候と同様ニて、大ニ力を落、致愁傷候。天命致方無之……、自今我等ハ大骨折ニ御座候」

忠敬は、隊員一同を福江に集め、亡骸を現福江市の芳春山宗念寺に葬り、七日間仕事を休み、弔意を表し善後策を練った。

測量に際して、当地の藩主五島盛繁は下役を遣わして饗応の次第について打ち合わせ、便宜を図り盛繁自身も

測量を見学し忠敬と会見したという。貞兵衛の病気に際しても再三見舞いの者を遣わし、見舞いの品も届けている。7月15日の病死の後には、三日間の市中での歌舞音曲を差し止めたといわれ、御用測量への協力ぶりが感じられる。



忠敬から至時への書状
(「伊能忠敬の科学的業績」古今書院より)

忠敬の全国測量は、至時、景保、重富とともに久保木清淵や坂部貞兵衛などの裏方の協力なくしては、成し得なかったが、一般者にはあまり理解されていない。

息子の八百次、本名弘道も父の後を受け、文化12年(1815)から13年にかけての伊豆七島、相武地方などの測量に参加したが、文政3年(1820)に病死した。

墓には正面に、湖月院達誉関山一空居士、右側には文化十年癸酉七月十五日俗名坂部貞兵衛惟道の文字が刻まれている。市内栄町に、伊能忠敬天測之地碑もある。
(→伊能忠敬の墓→高橋景保の墓→間重富の墓→久保木清淵の墓)

松浦史料博物館（「伊能図」収蔵）

（長崎県平戸市鏡川町12）



松浦史料博物館
（松浦史料博物館パンフレットより）



オランダ製地球儀
（松浦史料博物館パンフレットより）

平戸松浦の発祥の地平戸にある松浦史料博物館は、伊能忠敬が上程した「伊能図」を所蔵している。

伊能忠敬の地図が上程されたことは、平戸藩主松浦静山の著書「甲子夜話」にも書かれ、出所が明らかである。そこには、領内の地勢把握のため依頼し、忠敬が引き受けたとある。同博物館には、平戸島の大図と九州地方の中図が展示されている。

さらに、1700年オランダ製の地球儀と天球儀も所蔵していて、これは、第7代藩主静山が長崎で購入したものである。地球儀にある日本は、北海道が西北のアジア大陸と地続きになっており、さらに東北へも不確かな線ながら海岸線が連続している興味深いものである。天球儀には、各星座を表す動物などが色美しく表現されている。

松浦史料博物館の主な展示物は、これらの地図、地球儀の他、戦国時代の武器・武具、キリシタン関係、大名の調度品、陶器類など興味深いものが多い。桃山様式の石垣の上に白く長い塀をめぐらした資料館を含めた平戸の町並みには、松浦800年と出島以前のオランダとの交易が随所に偲ばれる。

長崎県立対馬歴史民俗資料館

(「対馬国絵図」所蔵)

(長崎県対馬市厳原町今屋敷668-1 09205-2-3687)

元禄期の国絵図作製は、元禄10年(1697)に始まり、元禄14年にほぼ完成したという。

「対馬国絵図」は、縦3.68m、横1.68m、縮尺約2万5千分の1の大きなもので、幕命によって作製が開始され、元禄13年(1700)に江戸幕府に献上されたという。当時の国絵図は、主に海岸線に重きがおかれていたが、同絵図には正確な海岸線とともに110余の村々の名と、それを結ぶ道路と航路、そして内陸には鳥瞰的に描かれた山々が描かれている。

これは伊能忠敬が対馬を訪れる約110余年前のことで、郡役人の手記によれば、伊能忠敬もその正確さを称賛したという。

なぜこのような優れた地図がこの地で作製されたのであろうか。

対馬宗家は、地理的な特徴と経済的優位性から中継貿易に重きを置いてきた。しかし、豊臣秀吉の朝鮮出兵によってこれが途絶え窮地に陥ったが、対馬は朝鮮との修好復活に努力を重ねてきた。やがて、徳川幕府の時代になって朝鮮使が来日し、講和が成立し、再び朝鮮貿易の権利を手中にすることができた。

この間、朝鮮外交の先兵となってきた対馬は、交渉を有利に導くため、高い情報収集能力とともに綿密な記録性を維持することになり、朝鮮との交流によって文化が進展し、広い分野での高い技術の取得があった。その結果は、34代に渡って続いた宗家の大量の古文書群によって裏付けられる。



長崎県立対馬歴史民俗博物館の宗家文庫
(長崎県立対馬歴史民俗博物館パンフレットより)



「対馬国絵図」

長崎県立対馬歴史民俗博物館厳原町資料館蔵
(「FUKUOKA STYLE」Vol13より)

このような位置にいた対馬藩は、元禄10年(1697)の国絵図作製に際して、家老以下36人の絵図役人を任命し全島の測量に従事させたといい、この中には「町間見算者」と呼ばれる測量師が3人含まれていたともいわれる。

彼らの測量方法はどのようなものであったのだろうか、同文庫に残された「御絵図記録」には細かに目盛られた磁針盤の図が残されている。また、測量にかり出された村民は、延べ9,994人、船1,115隻にものぼった。となると、磁針盤とともに間縄や梵天竿を用い、交会法や道線法によって地図作製にあたったのであろうか。詳しいことは不明である。

「対馬国絵図」は、宗家文庫約7万2千点を所蔵する長崎県立対馬歴史民俗資料館に、控え図1枚が現存している。

日本本土最西端の地

(長崎県佐世保市小佐々町 神崎鼻)



日本本土最西端の地のシンボル塔

五島列島や平戸島を望み、夕日の美しいことでも有名な長崎県旧小佐々町の神鼻岬の突端には、日本本土最西端の地のシンボル塔がある。

日本本土の定義が明らかではないが、北海道、本州、四国、九州の四島という意味合いだろうか。堅いことは言わないことにしよう。その日本本土の最端の地は、北海道稚内市(北)、北海道根室市(東)、小佐々町(西)、佐多町(南)ということらしい。

日本本土最西端の地は、佐世保から海岸線を平戸に抜ける小佐々町の県道を西へ1kmほど入ったところにあつて、鼻の先端には、青い海や夕日に映える白いシンボル塔が立っている。

シンボル塔を見た後は、小さな丘を巻くように散策道を登るとよい。芝生広場のもつ神崎鼻公園があり、巨大日本地図が出迎えてくれる。半球状上の日本地図の余白には、最端の市町が結んだ「四極交流盟約書」なるものが沿えられている。

西端の位置が、東経129度33分、北緯33度12分と分位までなのは、世界測地系への移行時期だったからだろうか。

神崎鼻を訪ねた人には町役場で『日本本土最西端訪問証明書』を発行してくれる。



神崎鼻公園の巨大日本地図

我が国初の経緯度原点確定の地碑(太陽面金星経過観測アメリカ隊観測地点)

(長崎県長崎市西山町1丁目 金刀比羅神社裏山)



経緯度原点確定の地碑

明治7年(1874)12月9日金星が太陽の前面を通過するという珍しい現象が105年ぶりに起こることが明らかになった。各国の天文学者は、この機会に地球と太陽との絶対距離を測定しようと、地球上の最良の観測地点を選んで観測隊を派遣することになり、フランス隊とアメリカ隊は、日本の長崎を観測地点として選定し、それぞれ日本政府に観測許可を申請した。

ところが、明治7年といえば明治政府という新しい船が出航して間もない混乱の時期である。観測許可には困難が予想された。しかし、紆余曲折はあったものの観測は許可され、日本人技術者も派遣し、欧米の技術を習得させようとする。このことへの政府の意気込みが感じられる一面である。

フランス隊は金比羅山、ダビッドソン博士(Davidson ?-?)を隊長、チットマン(Tittman ?-?)を観測技師とするアメリカ隊は大平山(別名;星取山)に陣を取り観測を開始する。

天文観測には世界と結ばれた正確な時計が必要である。だが、当時長崎には、上海、ウラジオストックとの間に海底ケーブルが引かれ、我が国で初めての国際電信業務が開始されていたのである。ダビッドソン博士は、金星日面通過観測と同時に、この電信を利用してロンドン、ワシントンと長崎の経度差を求めることを企てていた。この計画を知った日本政府は、長崎・東京間の経度

差から東京の経度を求めたいと希望し、長崎・東京間の電信線を敷設すると同時に、二人の技術者を派遣して観測を見学させたのである。

このとき求められた金星日面通過観測地点(長崎市星取山)をもとにしたダビッドソン点(長崎市松が枝町)と、明治7年12月20日から翌9年1月2日にかけてのチットマン技師を派遣しての東京との間で観測から両地点の経度差が得られた。このときの東京の観測地点が、日本経緯度原点の基になるチットマン点(東京都港区麻布台)である。

星取山における詳しい観測位置は不明だが、アメリカ隊が金星の太陽面通過観測したであろう地点に、1997年10月長崎測量設計業協会の手で、高さ1.5mの台座に直径50cmの天球儀が据えられたモニュメントが設置された。(→日本経緯度原点、→長崎金星<太陽面経過>観測碑、観測台)

「地図石」

(熊本市本丸1号1 熊本城内)



「地図石」

熊本城の櫓方門から入ってから数奇屋丸を通り、さらに石段を登る途中に、表面を平らに加工した大小様々な切石が、隙間無く組み上げられた石組みがある。

上から見ると、日本地図、熊本城の平面図、城下町図などに似て、不思議な文様に見えることから、「地図石」の名がある。

また、99個の石が組み合わせられていることから、「城の長寿を願ったまじない」あるいは、「茶の湯として使われていた数奇屋丸へ向かうための敷石」などの説もある。



熊本城案内図（天守左下が赤線が「地図石」）
(熊本城パンフレットより)

伊能忠敬測量史跡

(大分県別府市楠町3-5先)

忠敬は、文化 6年（1809）忠敬は、前年の旧暦の 8月27日に江戸を出て、岩槻、高崎、上諏訪、馬籠、岐阜、関ヶ原を経て11月 5日に淀城下に着いている。

その後山陽道を明石、姫路、竜野、岡山、広島と通り12月も押し迫った27日に小倉城下に着いた。

年が明けて12日には小倉を出立して、中津、杵築を経て、江戸を出てから約半年後の 2月、当地の測量をしたと思われる。その時、別府村の高札場に「江戸日本橋より 263里」の里程標を建てたといわれ（標柱裏面の説明）、それが大正年間まで現存していたというが今はない。

その後、昭和15年に別府市観光課の手で標柱が建てられ、昭和46年に別府ライオンズクラブの手で鉄製標柱に再建された。伊能忠敬「測量日記」文化七年二月十一日の項には、

「朝曇……中略

別府村（同上御料）字北濱、中濱、迄測。又（濱脇村、田野口村）両村入會字向濱迄測。（平田村より向濱迄一里二九丁一十一間）（別府村北濱村より制札迄打上二丁三十一間二尺）……略」

とあり、帰りの文化八年正月四日の項には、「…別府制札迄測る…」ともあることから、この時には制札は立てられていたと予想される。（→伊能忠敬宿泊跡碑→伊能勘解由忠敬測量遺跡）



伊能忠敬測量史跡碑（昭和15年）



伊能忠敬測量史跡碑（昭和46年）

伊能勘解由忠敬測量遺跡

(大分県津久見市堅浦602 海岸寺)



伊能勘解由忠敬測量遺跡
(若杉信二氏撮影)

忠敬は、伊能秀蔵、平山郡蔵、平山宗平、尾形慶助、大平雄助などの者を共に測量を実施してきたが、第2次測量（1801年）のころからは、彼らと二手に分かれての手分測量を度々実施して効率を上げてきた。さらに文化2年（1805）以降は、大手分けといわれる、かなり長期に渡って2班で別々に行動しての測量を実施した。特に、坂部貞兵衛の参加などで測量隊が充実した九州地方の測量では、これが40回以上にも及んでいる。

文化7年2月、隊はこの地方を二手に分かれて測量したが、この海岸寺で合流した。このときの測量を記念して碑が建てられたと思われるが、建立月日は明らかでない。この碑には、測量に従事した坂部貞之丞（貞兵衛）、下河邊政五郎、清水勝次郎、永井要助と侍四人、家来五人が来たとある。

現住職の話では、ここ海岸寺で待ち合わせ、食事をし、銀一両を置いていったとのことである。

ここに出てくる永井要助（甚左衛門）は、文化10年に坂部が五島で病死した後は、支隊を率いて測量に従事し、文化12年からの伊豆七島の測量には、老齢の忠敬に代わって測量隊を指揮した。また、下河邊は製図を得意とし、測量図の整理に当たっていたが、後に高橋景保の命を受け地図の描画にあたり、永井とともにシーボルト事件に連座して処罰された。

忠敬らの測量に関しては、滋賀県蒲生郡日野町（旧鎌掛村）に当時の測量の様子を記録した古文書、「御用天文測量方御通行一件」が残されている。

一行が文化6年8月に江戸を出発し、中山道・東海道を経て淀に出て、翌年末に赤間関に着き、小倉で越年した九州測量に赴く際の近江での出来事である。

そこには、測量の様子を描いた墨書きの挿し絵も添えられ臨場感がある。坂部貞兵衛と忠敬の二班の測量隊は、人足86人、馬一駄とその人足5人という大がかりなもので、戸数三百足らずの小村の村人の殆どが何らかの役に携わるほどの協力ぶりであったという。また、日野泊まりの予定が急遽、鎌掛泊まりになったことでの混乱の様子も記されている。

測量方は、一汁一菜の食事、酒のもてなしも受けず質素であったが、人馬賃銭などとして二朱と三百八十七文を支払った。実際に要した費用は二両と七十五貫二百五十四文であったという。ここ津久見でも、御用測量の旗の下で、村々の協力があつたのであろう。

近代史に残る貴重な地図は、このような村人の協力も得て成し得たのである。（→坂部貞兵衛の墓→伊能忠敬宿泊跡碑→伊能忠敬測量史跡）

読みにくさ、日本一の山「一尺八寸山
(みおうやま)」

(大分県日田市・中津市境)

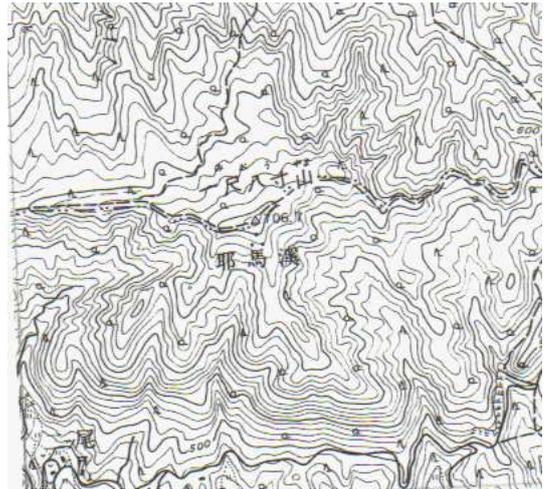
山と地図の愛好者のパソコン通信上で集まり、「山のフォーラム (FYAMA)」(代表 鳥越章夫) は、ネットを通じて 258の難しい読みの山を候補に上げ、投票によって日本一を募集したところ、大分県にある標高706.7 mの「一尺八寸山 (みおうやま)」が、圧倒的多数の票を得て日本一に選ばれた。

この投票を企画した神奈川県鳥越章夫さんと京都市の近藤真也さんらは、山頂に記念のプレートを設置し、御神酒を上げ、「難読地名日本一」を祝ったという(1997.5.3)。

「一尺八寸山」のいわれは、「当地の住民が、狩りで3頭の猪を捕らえた。いずれも大物で、それぞれの尾をつないで測った合計が一尺八寸もあったところから、この名がついた」という。また、この言い伝えを立証するかのように山麓には、長尾野、重尾、熊ノ尾、朝尾野、二ツ尾などの尾にちなんだ地名が多い。

ちなみに、難読地名の山ベスト26の名称と所在は、次のとおりである。

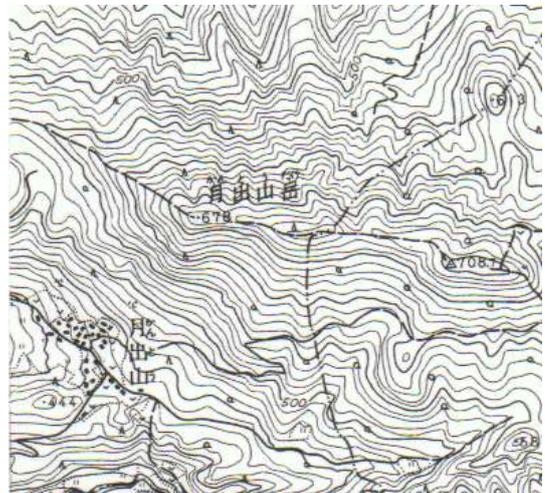
- | | |
|-------------------------------------|------|
| 1. 一尺八寸山 (みおうやま) | 130点 |
| 大分県日田市・中津市 (旧山国町) <裏耶馬溪> 706.7 m | |
| 2. 爺爺岳 (ちゃちゃだけ・ちゃちゃぬぶり) | 107点 |
| 北海道留夜別村<爺爺岳> 1822m | |
| 3. 日出山岳 (かんとうだけ) | 105点 |
| 大分県日田市<天ヶ瀬> 678m | |
| 4. 雲母峰 (きららみね) | 95点 |
| 三重県四日市市・菰野町<伊船> 888.4m | |
| 5. 岨巒堂山 (しよらんどうやま・そらんどうやま・しゅらんどうさん) | 77点 |
| 新潟県佐渡市<両津北部> 751.0m | |
| 6. 阿哲台 (あてつだい) | 67点 |
| 岡山県新見市<新見> 400~500m | |
| 7. 梅花皮岳 (かいらぎだけ) | 66点 |
| 山形県小国町・新潟県新発田市<飯豊山>
*2000m | |
| 8. 本富岳 (モッチョム岳 もっちよむだけ) | 64点 |
| 鹿児島屋久町<尾之間> 940m | |



一尺八寸山 (みおうやま)
1/25,000地形図「裏耶馬溪」



爺爺岳 (ちゃちゃだけ・ちゃちゃぬぶり)
1/25,000地形図「爺爺」



日出山岳 (かんとうだけ)
1/25,000地形図「天ヶ瀬」

9. 鰻轟山(うなぎとどろきやま)	54点
徳島県那賀町<小川口>	1046m
10. 後方羊蹄山(しりべしやま)	50点
北海道倶知安町<羊蹄山>	1843.7m
11. 設計山(もっけいやま)	49点
北海道北斗市(旧大野町)<設計山>	701.5m
12. 万年山(はねやま)	47点
大分県玖珠町<豊後中村>	140.2m
12. 父不見山(ててめえじやま、ててみずやま)	47点
群馬県神流町・埼玉県小鹿野町<万場>	1047m
14. 山毛櫛瀆山(ぶなつぶれやま)	43点
山形県小国町・飯豊町<岩倉>	898.3m
15. 皇海山(すかいさん)	41点
栃木県足尾町・群馬県沼田市<皇海山>	2143.6m
16. 子壇嶺岳(こまゆみだけ)	39点
長野県青木村<信濃西条>	1223.1m
17. 光岳(てかりだけ)	37点
長野県飯田市(旧南信濃村)・静岡県川根本町<光岳>	2591.1m
18. 大根下山(だいこんおろしやま; 大殺山)	34点
福島県檜枝岐村<高幽山>	1285.3m
19. 行藤山(むかばきやま)	31点
宮崎県延岡市<行藤山>	829.9m
20. 犢牛岳(こつといだけ)	30点
福岡県赤村<伊良原>	690.6m
20. 天狗角力取山(てんぐ<の>すもうとりやま)	30点
福島県郡山市・猪苗代町<関都>	1360m
山形県鶴岡市(旧朝日村)・西川村<大井沢>	1376m
22. 双石山(ぼろいしやま)	22点
宮崎県宮崎市<日向青島>	509.3m
23. 織山(きぬがさやま)	19点
滋賀県安土町・東近江市(旧能登川町)<八日市>	432.7m
24. 斧山(よきさん)	14点
奈良県十津川村<十津川温泉>	829m
25. 三頭山(みつづこやま)	13点
京都市右京区(旧京北町)<殿田>	728.2m
26. 山伏岳(やんぶしだけ、山伏)	9点
静岡県早川町・静岡市<梅ヶ島>	2013.7m

< >は、1/25,000地形図名

*印の標高は、等高線からの読みとり値、その他は三角点標高あるいは地形図の標高点数値である。読みについては、一部に地形図や地元、山岳会などで異なるものがあり、それらは併記した。

尚古集成館（石田三成が太閤検地の際に使用した”ものさし”を所蔵）

（鹿児島県鹿児島市吉野町磯9, 698-1 099-247-1511）



尚古集成館
（尚古集成館パンフレットより）

古来、土地の測量は収税を目的として発達してきた。それは日本においても例外ではなく、権力者支配が始まると同時に、戸籍作成と班田収受が行われた。

さらに支配地域が拡大され、農民による耕作面積や保有が複雑化すると、保有者の特定と石高の算定を行う検地（竿入れ）によって徴税の適性化が行われる。

検地の結果作成される現在の土地台帳にあたるものは、奈良時代にも見られるが、全国規模で統一した基準で行われた検地は、1582年豊臣秀吉の天下統一以降の太閤検地（1582～）が最初である。もちろんのこと、測量に際しては度量衡の統一も行われたであろう。

検地には、現在のポールにあたる梵天竹や細見竹、巻尺にあたる水縄、直角規にあたる十字などのほか、江戸期にはアリダートとコンパスにあたる小方儀などの測量機器が使用され、結果として、土地一筆ごとの地名や地目、等級、面積、石高、耕作者などが記載された検地帳（水帳）が作成された。

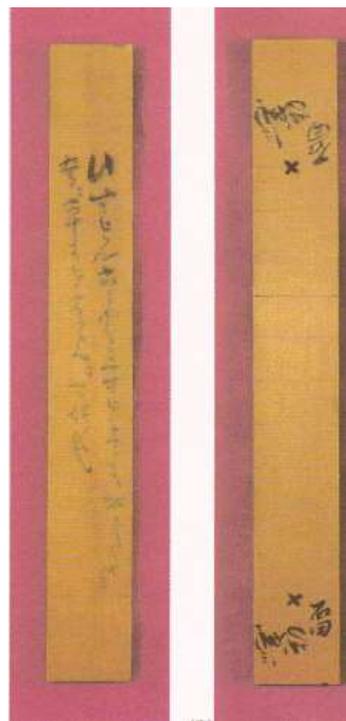
検地帳は、役人と農民が連判したものが二部作成され、一部は名主へ、他は勘定所に納められたといい、田畑、屋敷地などを生産力に格付けして米の石高に換算し、これを基に徴税が行われた。

さて、尚古集成館は、大正12年（1923）に開館した長い歴史を持つ博物館で、島津家伝来の史料を中心に文書や書画を始め歴代の当主らの鎧、薩摩切子や薩摩焼などの工芸品、機械類など約1万点を収蔵している。この尚古集成館一帯は、斉彬の時代に武器製造のための溶鋳炉

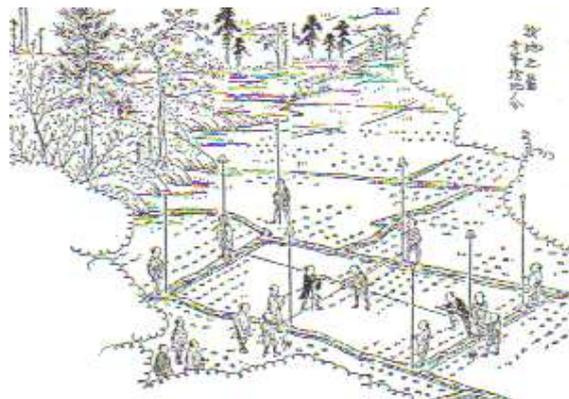
や機械工場のほか、ガラス製造所、陶器製造所などが集めた「集成館」と呼ばれる工場群であった。その後、生麦事件を機に起こった薩英戦争（1863）で焼失し、その一部が島津忠義によって再興され、前述のように大正期に資料館として開館したものである。

前置きが長くなったが、ここに文禄3年（1594）秀吉の命を受けた石田三成が島津領検地の際に使用したといわれる”ものさし”が所蔵・展示されている。

太閤検地は、石田三成と細川幽斎に命じられたといい、島津氏の領内は文禄3年から4年にかけて石田の下で実施されたという。



石田三成が使用したという”ものさし”
（尚古集成館パンフレットより）



検地の図（「県治要略」より）

検地尺は、上質の柂目桧板製で、表には墨による2個の×印で1尺の長さを表示し、さらに1寸ごとの目盛りがあり、石田三成（治少）の署名と花押がある。裏には、「この寸をもって、六尺三寸を壹間にあい定め候て、五間に六十間を壹反に仕るべく候なり」とある。これは、太閤検地尺として現存する唯一のものであり、国指定重要文化財になっている。

売店では、説明文付きの3分の2に縮めた複製尺が販売されている。

また、同館の測量地図に関連する所蔵物としては、斉彬が愛用したと見られる日時計や地球儀、世界図のほか、大永6年（1526）から約70年間の島津藩の勢力を地図に表現した「薩隅日沿革地図」、さらには文化元年（1804）に藩蔵版として出版したという「成形図説」などがある。同図説巻九には、霊台儀象志測量図と称して、水準儀と水準測量などが紹介されているなど興味深い。

「印部土手石（しるしべどていし）」

あるいは「ハル石」

（沖縄県名護市古我知など）



ハル石（南風原文化センター）

「印部土手石（しるしべどていし）」あるいは「ハル石」は、琉球最高の行政ポスト「三司官」にあって、琉球王国の経営に多大な業績を残した蔡温の指導の下で、琉球王国が独自に行った検地、いわゆる元文検地（元文年間1736年～1750年）の際に使用された図根点である。

正式には「印部土手石」といい、直径約6尺（180cm）、高さ約3尺（90cm）周囲を根張石で固めた高まりの上に、高さ30～75cm、幅13～50cm、厚さ5～15cmの石碑からなる図根点を置き、ここから各筆の十字竿（筆の中心）などまでの方向角と距離を測定し、竿入れ帳に記載することで行われた。

石碑には、原名（ハル、パル、小字名）と「い、ろ、は、に、…」といった一連番号が刻まれていることから、「ハル石」と呼ばれ、沖縄各地で発見され保存されている。設置当初は、各間切りごとに200～300基、王府全体で7,000～8,000基の「ハル石」が設置されたといわれ、現在は、そのうち150基の現存が確認されている。

検地の際に測量結果が記入された、竿入帳には、「ハル石」から筆界方向などの角度と距離などが記入され、この結果から「針図」と呼ばれる「測量図」が作成されたという。竿入帳は2600余冊作られたというが、残されているのは3冊だけ、針図は現存が確認されていない。

この検地は、この当時海岸低地部を中心に実施された大規模な耕地開発と集落移動を把握するために行われ、残された竿入帳の内容からは、高度な測量であったこと

と、田畑・家屋などの土地利用調査も行われていたことがうかがわれる。

また、検地本来の目的である徴税のために使用された形跡がないこと、蔡温が進めていた山林経営のことから推測すると、今後守るべき森林資源把握のためにしたのではないかとみられている。

この「ハル石」、一般住民の間では正確な意味が受け継がれなかったことで、信仰の対象となる「拝所」として祀られるものもあった。沖縄県には、「ハル石」に興味を持つ郷土史家も多く、文化史跡としての石の保存も進んでおり、当時の測量の解明が進んでいる。



ハル石の模式図（「南風原の文化財」より）



拝所となったハル石（那覇市小禄）